令和５（２０２３）年度

文部科学省委託事業「青少年国際交流推進事業」

日韓高校生交流
事業報告書

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

目 次

事業全体概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

＜派遣事業報告＞
１．参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
２．日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
３．派遣事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
４．学習成果発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
５．参加者アンケート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
６．事業後の成果発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
７．成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

＜受入事業報告＞
１．参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
２．日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
３．受入事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
４．学習成果発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
５．成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２

事業全体概要

１．事業趣旨

日本と韓国の高校生の相互交流を通して、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

２．実施関係機関

（１）主催

日本：文部科学省

韓国：国立国際教育院

（２）実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

韓国：江原（カンウォン）大学

３．参加人数

日　本：３０名、引率者５名

韓　国：３０名、引率者５名

４．日程

（１）派遣

引率者研修	９月２９日（金）	オンライン
事前研修	１０月　７日（土）	オンライン
派遣	１０月３０日（月）～１１月　３日（金）	５日間

（２）受入

日本受入	９月１９日（火）～　９月２３日（土）	５日間

派 遣 事 業 報 告

１．名簿

１）参加者名簿

	氏名	学校	地域
1	泉谷　ゆらら	北海道札幌国際情報高等学校	北海道
2	晴山　瑠乃	岩手県立花巻南高等学校	岩手県
3	森田　千鶴	秋田県立能代松陽高等学校	秋田県
4	清野　美咲	山形県立天童高等学校	山形県
5	阿部　遥那	福島県立あさか開成高等学校	福島県
6	マハルジャン　さくら	群馬県立伊勢崎高等学校	群馬県
7	鈴木　美佑	埼玉県立春日部女子高等学校	埼玉県
8	藤谷　咲沙	東京都立青梅総合高等学校	東京都
9	小林　小夏	神奈川県立横浜国際高等学校	神奈川県
10	オーローク　サブリナ　桜子	神奈川県立横浜国際高等学校	神奈川県
11	三橋　ほのか	神奈川県立横浜国際高等学校	神奈川県
12	山本　知佳	横浜市立横浜商業高等学校	神奈川県
13	石内　さわ	川崎市立橘高等学校	神奈川県
14	髙橋　凛汰郎	川崎市立橘高等学校	神奈川県
15	宮嵜　こころ	長野県長野西高等学校	長野県
16	高遠　咲楽	長野県長野西高等学校	長野県
17	加藤　たまき	愛知県立千種高等学校	愛知県
18	山脇　愛介	京都府立鳥羽高等学校	京都府
19	成瀬　和陽	大阪府立花園高等学校	大阪府
20	早田　恋夏	兵庫県立神戸甲北高等学校	兵庫県
21	増田　祥子	奈良県立国際高等学校	奈良県
22	中川　和紀	和歌山県立星林高等学校	和歌山県
23	足立　ほの香	鳥取県立境高等学校	鳥取県
24	福谷　うの	岡山市立岡山後楽館高等学校	岡山県
25	伊達　未悠	山口県立下関中等教育学校	山口県
26	勢喜　菜々実	福岡県立福岡魁誠高等学校	福岡県
27	福島　阿壬	長崎県立対馬高等学校	長崎県
28	簑原　日向子	大分県立大分西高等学校	大分県
29	山﨑　聖楽	鹿児島県立鹿児島東高等学校	鹿児島県
30	金城　遥琉	沖縄県立名護高等学校	沖縄県

２）引率者名簿

	氏名	所属	役職
団長	尾中　純一	国立阿蘇青少年交流の家	次長
引率	山下　明美	国立青少年教育振興機構 財務部財務課	財務企画係主任
引率	貞方　貴衣	国立諫早青少年自然の家	事業推進係主任
引率	河村　幸音	国立青少年教育振興機構 経営企画室	室員
引率	直江　春香	国立磐梯青少年交流の家	事業推進係員

２．日程

	日付	時間	プログラム
―	10 月 7 日 （土）	午前 午後	講義「日韓大衆文化交流の歴史」 渡航に関する説明 団・班ミーティング
1	10 月 30 日 （月）	午後 夜	金浦（キンポ）空港着 オリエンテーション
2	10 月 31 日 （火）	午前 午後	講義 歓迎会 訪問：ミュージアムキムチ間 散策：明洞（ミョンドン）・仁寺洞（インサドン）
3	11 月 1 日 （水）	午前 午後 夜	訪問：富川市庁 訪問：遠宗高等学校 見学：龍山戦争記念館 K-POP 体験
4	11 月 2 日 （木）	午前 午後	学習成果発表会 訪問：高麗大学
5	11 月 3 日 （金）	午前	金浦空港発

３．派遣事業概要

＜10 月 7 日（土）＞

〇事前研修

午前中は帝塚山学院大学の稲川右樹（いながわゆうき）氏より「日韓大衆文化交流の歴史」と題し、日本と韓国の大衆文化が互いにどのように影響し合ってきたのかをテーマに講義を受けた。午後は事業概要の説明を行った後、旅行会社から搭乗手続きや持ち物等について案内を受けた。その後、班毎に自己紹介や事前課題の共有、班目標の決定を行った。

講義を受ける様子

事前課題の共有

＜10 月 3 1 日（火）＞

○国立国際教育院

国立国際教育院では、江原大学の井口恵菜氏より文化言語について、韓信大学の韓光熙氏より経済について、江原大学の孫承喆氏より歴史について講義を受けた。日本と韓国の様々な分野での関わりについて知ることができた。

国立国際教育院での講義①

国立国際教育院での講義②

○ミュージアムキムチ間

韓国を代表する食べ物である「キムチ」について、歴史や種類、作り方など、展示やタッチパネルを通して学んだ。実際にキムチ作りを体験し、キムチ作りの奥深さを知ることができ、韓国文化への理解を深める機会となった。

キムチ作りの様子

キムチ完成

展示ブースの見学

＜11 月 1 日（水）＞

○富川（ブチョン）市庁

富川市庁を訪問し、併設された図書館やアートセンター、CCTV（監視カメラ）管制センター等を見学した。韓国の行政機関が果たす役割について知ることで、日韓それぞれの行政機関と市民の関わりについて考える機会に繋がった。

Bucheon Hands up!（富川市マスコットキャラクター）前で集合写真

CCTV 管制センターの見学

○遠宗（ウォンジョン）高等学校

遠宗高等学校の生徒とペアを組み、実際の高校生活を体験した。歓迎会では両国の代表生徒がそれぞれダンスのパフォーマンスをした。午後は「両国の温かい言葉について」と題して話し合いをし、それぞれの言葉はもちろんのこと、その言葉の意味について理解することができた。また、韓国の伝統遊びであるユンノリという双六に似た遊びや型抜きにも挑戦し、日本と韓国の共通点・相違点にについて多くのことを考える機会となった。

みんなで給食

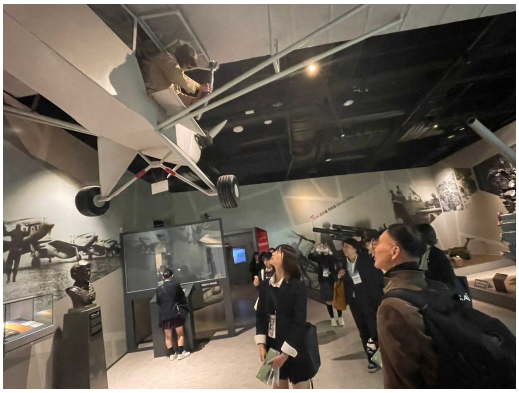
ユンノリの様子

型抜きに挑戦

○龍山（ヨンサン）戦争記念館

朝鮮半島の戦争史、特に朝鮮戦争についての展示を見学した。朝鮮半島の戦争史を学ぶとともに、韓国側の視点から戦争に触れることで、同じ戦争でも視点によって捉え方が異なるということを改めて知ることに繋がった。

展示ブースの見学①



展示ブースの見学②

○ワールド K-POP センター

ワールド K-POP センターでは、韓国のアイドルグループにもダンスを教えている先生から本格的なダンスレッスンを受けた。練習の成果として、数人ごとにみんなの前で発表を行った。

鏡を見ながら練習

レッスンの様子

ダンス披露

＜11 月２日（木）＞

○高麗（こうらい）大学訪問

高麗大学では、大学概要や留学制度についての説明を聞き、どのような方法で韓国の大学に留学することができるのか知ることができた。その後、日本人留学生から韓国に興味を持ったきっかけや大学に入学するまでにどのようなことをしてきたか等のお話を聞いたことで、参加者のモチベーションを高めることに繋がった。

留学制度の説明

日本人留学生による講義

４．学習成果発表会

１）１班：足立　ほの香、泉谷　ゆらら、小林　小夏、髙橋　凛汰郎、藤谷　咲沙、
マハルジャン　さくら、簑原　日向子、宮嵜　こころ

①共通点

・高校の制服がある。
・両国の食べ物がコンビニで売られている。

②相違点

・買い物をするときに、韓国では１＋１、２＋１などの制度があり、その場で１個分無料になるが、日本では次回使える割引クーポンが一般的。
・韓国の飲食店には必ずキムチなどの副菜が置いてある。
・日本の高校では給食はほとんどないが、韓国の高校では無料で給食が食べられる。

③韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・韓国のお店では、日本語や英語で対応してもらえることが多かった。

④日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・日本では「韓国フェア」が開催されていたり、コリアンタウンがあったり等韓国の文化を広く知る機会がある。

２）２班：石内　さわ、オーローク　サブリナ　桜子、高遠　咲楽、伊達　未悠、
晴山　瑠乃、増田　祥子、山﨑　聖楽、山脇　愛介

①共通点

・戦争体験がある。
・低出産、少子高齢化で経済成長率が低下している。

②日韓相違点について確認し修正してください。

・建造物では、韓国は石で、日本は木でできているものが多い。
・韓国の家庭には「キムチ冷蔵庫」というキムチに特化した冷蔵庫があるが、日本では一般的な冷蔵庫にキムチを保存する。
・韓国の学校の給食は日本より量が多く、廃棄が多い。

③韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・監視カメラがたくさん設置されている。
・有料レジ袋の配布が禁止されており、エコバッグを持ち歩く習慣がある。

④日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・交通ルールのマナー。

３）３班：阿部　遥那、清野　美咲、勢喜　菜々実、中川　和紀、成瀬　和陽、
早田　恋夏、三橋　ほのか

①共通点

・お互いのポップカルチャーや食文化を取り入れ合っている。
・伝統文化の体験や観光客向けの店を増やす等、観光に力を入れている地域がある。

②相違点

・韓国では宗教に関する祝日があるが、日本は政教分離のため宗教に関する祝日は無く、文化や季節に関する祝日が多い。
・建築物の素材について韓国は石材、日本は木材を主としている。
・学校生活で、韓国は給食や休み時間をクラス全体で過ごしている姿が見られたが、日本は個人や少人数のグループで過ごしていることが多い。

③韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・注文前に小皿料理が出てくる等、食事のサービスが良い。
・日本と比べて校則が緩く、生徒の自主性に任せている部分が多い。

④日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・公共の場にゴミ箱が設置されているため、路上のごみが少ない。
・自由に使えるトイレが多く、設備が整っている。

４）４班：加藤　たまき、金城　遥琉、鈴木　美佑、福島　阿壬、福谷　うの、
森田　千鶴、山本　知佳

①共通点

・韓国の漢字語と日本の音読みが似ている。
・点字ブロックが整備されている。

②相違点

・昔の建築物の素材が違う。
・韓国の市役所では監視カメラの管理が行われている。
・韓国の高校は給食が無料で食べられる。

③韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・キャッシュレス化が進んでいる。
・交通費が安い。

④日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・トイレの整備が整っている。
・道がきれいであり、交通整備がしっかりされている。

５．参加者アンケート

（１）アンケート集計結果

①日本人として世界に貢献したい。

とても思う	８０％
少し思う	２０％
あまり思わない	０％
全く思わない	０％

②外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい。

とても思う	９０％
少し思う	１０％
あまり思わない	０％
全く思わない	０％

③交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい。

とても思う	９０％
少し思う	１０％
あまり思わない	０％
全く思わない	０％

（２）結果の分析

〇外向き志向

とても思う	８６．７％
少し思う	１３．３％
あまり思わない	０％
全く思わない	０％

【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目３項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか？」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか？」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか？」のアンケート結果を集計したものである。国立青少年教育振興機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が 80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

６．事業後の成果発表

日本人参加者には、本事業終了後の課題として各自学んだ成果について各所属校の生徒に向けて、発表することを求めている。以下は報告例（抜粋）である。

１）

日時	2023 年 12 月 4 日（月）
会場	教室
参加人数	41 人
主な発表内容	○派遣事業の内容 2002 年に開催されたワールドカップサッカー大会を契機として「日韓共同未来プロジェクト」の一環として発足しました。日韓交流を通して、互いの国の文化、またその背景に触れることで自国のことについても知る重要性を再認識するとともに、文化の違いを理解し、よりよい日韓関係を築く一歩に繋げることを目的としています。 ○特に印象に残った活動 私が一番印象に残った活動は高校訪問です。韓国の高校は日本の高校と異なる部分も多く新鮮でした。まず、校則に囚われていないところです。スカート、スラックス、リボン、ネクタイなど性別問わず自由に着こなしている韓国の生徒の姿を多く見かけ、ジェンダーレスの意識が根付いているように感じられました。最近では日本でも制服の多様化が認められるようになってきたと思うので、両国どちらも性別の多様化に柔軟に対応し続ける国であればいいと思いました。また、給食が無償なことに驚きました。日本の高校生のほとんどがお弁当を持参しますが、韓国では小中学校のように給食が支給されます。成長期の高校生に合わせた十分な量で、生徒全員が食堂に集まって食べる光景はとてもにぎやかで、見ていてとても微笑ましかったです。そして韓国の高校生たちとアニメ、漫画の話やアイドルの話など両国で今流行しているものを共有できてとても嬉しかったです。ジブリや呪術廻戦など日本のアニメや映画は韓国でも有名でリスペクトしていると聞いて、これからも日韓お互いにリスペクトしあえる関係が作れたらいいと思いました。 ○まとめ、感想 ４泊５日という短い期間でしたが、私にたくさんの素晴らしい経験をさせてくれた本当に充実した５日間でした。はじめに、全国から集まっ

	た初めて出会うたくさんの高校生と交流できたことが私にとってとても楽しい経験になりましたし、日韓関係をより良くしたいと思っている高校生がこんなにたくさんいるのだと心が温かくなりました。そして、韓国には素敵な人がたくさんいます。韓国滞在中、買い物をしていた時に日本人だと気付いた瞬間ゆっくり韓国語を話してくださった方や、私が寒いなと腕をさすっていたときにマフラーを首に巻いてくださった方もいました。韓国の方は周りを見て親切に対応してくださる方がたくさんいるのだと感動しました。また、韓国には日本にはない魅力的な場所がたくさんありました。仁寺洞では韓国の歴史が感じられる建造物やお土産に触れられましたし、キムチミュージアムではキムチの歴史を知り、キムチ作り体験にも挑戦しました。日本では感じられない韓国だからこその文化の魅力に気付くことができてとても嬉しかったです。今回の事業を通して、文化の違いを自ら発見し、その違いがあるからこそそれぞれの国の美しさに出会えるのだと身を持って感じました。素晴らしい５日間をありがとうございました。 〇発表方法、対象 方法：テレビに写真を映しながら説明。 対象：高校１、２年生 〇発表を聞いて韓国に興味を持ってくれた生徒や、実際に韓国に行ってみたいという生徒がたくさんいました。

２）

日時	2023 年 11 月 14 日（火）
会場	視聴覚教室
参加人数	64 人
主な発表内容	○派遣事業の概要 　言語・文化・経済の講義を受け、日韓の共通点・相違点を学びました。また、高校・大学訪問、カクテキ作り、市役所・キムチ歴史館訪問、K-POP センターでの訪問・ダンス体験など現地で実際に韓国の文化を学びました。さらに、ホテルの宿泊、ボランティア大学生との交流などを通して日韓を繋ぐ者同士で人間関係の輪を広げました。 ○特に印象に残った活動 　伝えきれないほど沢山ありますが、一番は高校でのダンス披露です。私は最初の事前研修で高校訪問でのパフォーマンスの募集を聞いた時、何か爪痕を残そうと手を挙げました。あの時、私はまだダンスを始めて１ヶ月でした。自分にとっての初舞台がソロでのダンス披露で、他の 2 人に負けじと韓国へ渡航する日までたくさんの練習を重ねました。その努力が実り、会場で私のダンスを見た観客の皆さんが湧いて下さいました。さらに、韓国の方から日本の方までいろいろな場面で声をかけて下さいました。本当にそれが嬉しく、今では渡航前よりもさまざまなダンスに興味を持ち、次の舞台に向けて研究しています。この経験は、私にとって勇気となりました。感謝しています。 ○まとめ、感想 　この事業では日韓の共通点・相違点を講義から目・耳で学ぶだけでなく、訪問や体験、散策などを通じて肌で学ぶことができました。私たちの班は「日韓を繋ぐ虹になろう」という目標でした。講義では、日韓の関係について学び、訪問や体験、散策では韓国の文化について学んだ事で、日韓友好について自身の考えを深めることができ、虹を作るための材料を調達できました。さらに、韓国の高校の方や、ボランティアの大学生、韓国の団長などと交流し、仲を深められたことで虹の 7 色のうちの 1 色になれたのではないかと思います。この事業に参加して一番大きかったことは、韓国語を話せる学生がいて、刺激をもらったことです。この事業に参加する前、韓国語を話せない人でも大丈夫という説明を読みました。それに少し安心していましたが、実際みんなに会ってみると、話せる人が沢山いました。まだ韓国語を勉強し始めて 6 ヶ月の私はとて

	も衝撃を受けました。しかし、そのおかげで次に韓国に来た時には大学生とたくさんお話をしたいと切実に思いました。韓国語が話せない私は大学生スタッフのジュンさんとの会話が全くできず、仲をあまり深められませんでした。それがとても悔しく、帰国してからは猛勉強をしています。そのモチベーションとなっているのは、この事業に参加したことで出会えた韓国人の方々、そして日本の学生 29 人です。韓国へ渡航前の私は将来の夢が決まっていませんでしたが、この事業に参加し、空港での韓国人接客をしたいと思うようになりました。他にもダンスで韓国に関わりたいとも思っています。ソロでのダンスで勇気をもらい、日韓についての経験が周りの子より 1 つ上に進み、助け合える仲間が増えて本当に最高な 5 日間でした。この事業に参加して後悔はありません。すごくみんなが恋しいです。長くなりましたが正直まだまだ書きたいことはたくさんあります。日韓を繋ぐ虹になります。 ・発表方法、対象 発表方法：教壇に立って話す。 対象：韓国語、中国語選択者

７．成果と課題

１）団長　　尾中　純一（国立阿蘇青少年交流の家　次長）

①はじめに

新型コロナウイルスの影響により、対面での様々な交流の機会が制限されてきた中、４年ぶりにこの「日韓高校生交流」を対面で実施することができたことを大変嬉しく思う。

すっかりリモートでのやり取りや交流が主流となってしまった中で、この『リアル』な交流事業を再開できたことは、これから日本や世界を築く役割を担う高校生たちにとっては大きな成果となったであろう。

また、この「日韓高校生交流」にあたっては、韓国国立国際教育院（NIIED）や江原大学をはじめとした多くの関係機関・団体による厚い支援をいただいたことに加え、日本各地から集まった30名の参加者たちそれぞれが持つ熱意によって、大変有意義な事業となったと言える。

②成果と課題

派遣団として参加が決まった高校生たちの志望動機等を読んだ時点で、私は大変感銘を受けた。単に、韓国語を学んでいる高校生という訳ではなく、既に韓国の方との交流をしている者や NGO 等でボランティア活動を実践している者など、立派に日韓の架け橋としての礎を築いていたためだ。

そんな彼らだが、これまでのコロナ禍により『リアル』な交流は制限されていた。今回の訪韓、直接韓国の空気を吸い、自分の目や耳で韓国を確かめるといった本事業をどれほど待ち望んでいただろうか。

参加者をリモートでつないだ事前研修の時から、彼らのモチベーションは高く、「恐れずに交流しよう」「積極的に韓国語を使おう」など、どのグループも意識の高い目標を掲げ、訪韓を楽しみにしている様子が伺えた。

先述ではコロナ禍による弊害を述べたが、一方でリモートに慣れた彼らは、我々職員の知らない間に、ZOOM や LINE などのアプリを活用して事前研修後も連絡を取り合いながら準備を進めていたのだ。自分達同士でコミュニケーションを図り交流を始めていたことを後になって知り大変感心した。

コミュニケーションを大切にしてくれるそんな彼らにとって、一番の成果、一番の思い出は韓国の高校生との交流の時間であっただろう。

日本団が乗るバスが遠宗高校に入った瞬間から、グラウンドや校舎の窓、校舎の前で多くの韓国の高校生が手を振り、日本語で歓迎の意を表してくれていた。これほどの歓迎を受ければ、日本団全員のテンションが上がらないはずがない。正直、彼らなりに多少の緊張なり不安があったと思うが、一気に期待と笑顔に変わった瞬間が見受けられ

た。

高校訪問では歓迎のセレモニーがあり、団長挨拶の時間を設けていただいていた。この団長挨拶の中で、彼らの顔を見ると自然に言葉が出てきた。「彼らはこの交流事業への参加が決まった瞬間から、韓国の皆さんとこうして交流できる機会を一番に楽しみにしていた。どんな人がペアになってくれるのかな、どんなプレゼントを準備しようかな。こうした期待は止むことはなかった。そして韓国の皆さんからの熱い歓迎を受けて、こんな幸せなことはない。ありがとう」こんな言葉を挨拶の中で伝えた。

日本人だけでなく、韓国の高校生も同じ気持ちを持っていてくれたことは大変喜ばしいことだった。その後、あまり言葉も交わしていない高校生同士の交流が始まった。それぞれのペアで食堂に移動し一緒に昼食を摂る様子は、幼馴染が集まる同窓会のようだった。

高校訪問では、日本語と韓国語の『温かい言葉』を学び合った。“ありがとう”といった既知の言葉ではなく、“気にするな” “なんとかなる” “ドンマイ” などを意味する言葉を互いに出し合っていた。

交流する上で互いを責めるといったような言葉は不要で、相手を理解したり、受け入れたりする言葉の大切さを彼らの様子から気付かされた。日常会話を韓国語で喋ることができることよりも、相手に寄り添える声掛けをできることの方がその何倍も人同士の繋がりが深まることを実感した。

本事業をとおして当初の目的であった「高い国際感覚を備えた青少年の育成」に収まることなく、あらゆる人との繋がりを持ち、互いに理解しようとする青少年の育成となったのではないだろうか。惜しみなく交流することができ、交流をとおした自己の成長を得ることができたことが一番の成果である。

強いて課題を挙げるとすれば、短い時間の中で様々なプログラムが盛り込まれ過ぎていたことであろう。多くの経験・体験を提供したい思いもあるが、ゆっくりと時間をかけるプログラムもあってよいのではなかろうか。

③おわりに

本事業の目的達成だけでなく、彼らの安全を一番に考えながらコーディネートしていただいた江原大学のイ先生、ユン先生をはじめとする関係方々、彼らの最高の学びとなったプログラムを提供いただいた遠宗高校の先生方、生徒の皆さまに心より御礼申し上げたい。

時代によって、あるいはその時々の政治によって日韓関係の浮き沈みがあるのは事実である。しかし、未来を築く彼らにとって、それらは壁ではない。彼らによって壁が取り除かれた日韓関係は今後も明るいものとなるだろう。

２）リーダー　山下　明美（財務部財務課　財務企画係主任）

「自分たちの現在地」

本事業に引率者として参加し、対面での実体験は多くの対話を生み、自己を俯瞰して視る機会が増え、自分自身の現在地が浮き彫りになることを改めて強く感じた。参加者は文化体験や自治体・高校訪問を通し両国の違いを考察し、それらを発表する際も、既に持っている知見や自身の感覚と比較している姿が見えた。だがそれ以上に事業を共にするメンバーや、交流した高校生や大学生との何気ない交流から、自分の特性や現状などを明確にし、自分の在り方について考える機会となったと、ふりかえりを行う者が多かった。ある者は韓国側の高校生が積極的に会話をする姿と自分の内向的な姿を比較したり、同じ日本人同士でも韓国語の会話レベルの違いはあるが、スマホを使って積極的にやり取りしていく姿を目の当たりにしたりと、対面で行う体験にはプログラム以外の余白の時間でも、対話する機会と自分を内省する機会が多く生まれ、それらの何気ない体験は日常とは違う環境だからこそ際立ったからだと思う。

参加者には今回の事業で感じた、自分の現在地を踏まえ、次は将来の姿に向けて、道標を決めていくと思うが、本事業で感じたことや考えたことまた、広がった視野を狭めることなく、自分の在り方を築き、なりたい姿へ進んでいってもらえたらと思う。

３）リーダー　貞方　貴衣（国立諫早青少年自然の家　事業推進係主任）

「一致団結して恐れず交流！」

出発前、オンライン事前研修の中で、参加者たちは「韓国語を話し、コミュニケーションをとることを頑張りたい」、と意気込んでいた。また、せっかくこのメンバーで韓国に行くのだからと班交流も深めたいと【一致団結して恐れず交流！】と４班で目標を掲げていた。

特に、韓国の高校訪問では、不安な表情を見せつつも、必死にコミュニケーションを図ろうと頑張っている姿が印象的だった。高校訪問後に「ただの観光旅行では高校生と交流できる機会はない。このプログラムだからできたことで、本当に良かった！」「たくさんの友達ができた！連絡先も交換できた！」と笑顔で話をしてくれた生徒もおり、それぞれが成長していく姿を見ていると、この交流の素晴らしさを改めて感じた。

また、成果発表会ではパソコンの不具合などのハプニングもあったものの、発表内容を班の仲間で教えあったりしながら【一致団結】して仕上げていく姿に成長を感じた。

参加者たちは、韓国の方との交流や文化体験を通して、韓国の良さと日本の良さに気付き、それと同時に、一緒に過ごした仲間とも交流し、有意義な時間を過ごせたようだ。今後も韓国でできたつながりと一緒に過ごした仲間とのつながりを絶やさず、その輪を広げていってほしいと願う。

４）リーダー　河村　幸音（経営企画室　室員）

「引率を終えて」

初めて国際交流に参加したときから、「大人になったらいつか挑戦したい」と願っていた国際事業引率の機会をいただけたことに心から感謝しています。

今回の研修では、引率者として参加者を支える自分を想像していたものの、高校生の熱心な姿から刺激をもらうばかりでした。語学の面では、韓国語で代表挨拶をする、韓国語で注文するなど、各自のレベルで着実に進歩していました。また韓国の大学生・高校生との交流プログラムのみならず、ほぼ初対面の参加者同士が班・団として過ごす日常生活や成果発表においても、一人ひとりの挑戦や努力が見えました。

帰国の直前、ある参加者に「何が一番よかった？」と尋ねると、「みんなに出会えたこと！すべてのつながりに価値があると思った」と話してくれました。5 日間の研修を一生懸命頑張ったからこその言葉にぐっときたのと同時に、若い世代が国を超えた人と人とのつながりに価値を感じられる国際交流は、大変に意味のある活動だと改めて実感しました。そして、自身が参加者であった時とは異なる視点を持っていることにも気づかされました。

参加した高校生には、今の気持ちを大切にしながら、これからもさまざまなチャンスをつかんでほしいと思います。

５）リーダー　直江　春香（国立磐梯青少年交流の家　事業推進係）

「韓国訪問を通した高校生達の成長」

今回の参加者は、韓国の音楽やテレビ番組を見ていたりオンラインで交流をしたりと、日本にいながらも韓国の方との交流を積極的に行った経験がある参加者が多かった。事前研修では「画面越しでしか『韓国』を見たことがないから、自分の目で直接見て、もっと韓国を知りたい」と意気込みを口にしている参加者もいた。

韓国に到着後、参加者たちは今まで学んできた韓国語を積極的に使って、訪問先の高校生や大学生ボランティアスタッフと交流するなどして、韓国の文化や生活について多くのことを学ぶことができた。また、街を散策したり、飲食店に入ったりと実際に訪れないとできない体験もし、日本と韓国それぞれの良さを見つけていた。

今の時代は、オンラインを通して日本に居ながらも海外の情報を得ることはできるが、今回の事業では、実際に現地へ行くことでしか得ることができない貴重な経験をたくさん積むことができていた。そして、これまでは、韓国に留学したい、働きたいという憧れのような気持ちで考えていた参加者たちが、事業を経て、韓国と将来どのように関わりたいかをより現実的な目標として考える姿がみられた。

今回の交流を通じて得た知識や経験を生かし、これから両国の友好関係や文化交流を促進してくれることを期待する。

受 入 事 業 報 告

１．名簿

１）参加者名簿

	氏名	ローマ字表記	学校	地域
1	イ･ウンギョ	LEE WOON GYEO	城南高等学校	ソウル
2	カン･ジュソン	KANG JOO SUN	門峴女子高等学校	釜山
3	チャン･ソユン	JANG SEO YUN	仁一女子高等学校	仁川
4	ハン･ドユン	HAN DO YUN	全南高等学校	光州
5	チョ･インヘ	CHO IN HYE	ソダム高等学校	世宗
6	チョ･ソヨン	CHO SEO YEON	安城女子高等学校	京畿
7	ソン･セイン	SON SE IN	誠庵国際貿易高等学校	ソウル
8	オム･チェウォン	UM CHAE WON	釜山観光高等学校	釜山
9	アン･ジュンヒョク	AN JUN HYEOK	新松高等学校	仁川
10	チョン･ミンジョン	CHUNG MIN JEONG	普文高等学校	光州
11	イ･ギウォン	LEE GI WON	遠宗高等学校	京畿
12	キム･ガンビン	KIM KANG BIN	清州外国語高等学校	忠北
13	キム･ガヒョン	KIM GA HYUN	英坡女子高等学校	ソウル
14	ソン･ソアン	SONG SEO AN	釜山東女子高等学校	釜山
15	チェ･ジョンウ	CHOI JEONG WOO	仁川南高等学教	仁川
16	ウ･スビン	WOO SU BIN	雪花高等学校	忠南
17	キム･ヒョンド	KIM HYUN DO	裡里高等学校	全北
18	チャン･ウンソ	JANG EUN SEO	南岳高等学校	全南
19	ヤン･ヒチャン	YANG HEE CHAN	培明高等学校	ソウル
20	ペク･ソユン	BAEK SEO YOON	盤如高等学校	釜山
21	ミン･ソヨン	MIN SEO YEON	仁川海源高等学校	仁川
22	オ･ギョンジン	OH KYUNG JIN	忠南外国語高等学校	忠南
23	ソン･チェウォン	SON CHAE WON	全州ソルネ高等学校	全北
24	ホン･ジュヒョン	HONG JU HYEON	禮堂高等学校	全南
25	パク･ソジュン	PARK SEO JUN	京仁高等学校	ソウル
26	イ･ハヌル	LEE HA NEUL	慶南女子高等学校	釜山
27	イ･チェウォン	LEE CHAE WON	仁川富興高等学校	仁川
28	イ･ジュンウ	LEE JUN WOO	仁荷大学校師範大学附属高等学校	仁川
29	チョン･ジミン	JUNG JI MIN	慶山女子高等学校	京北
30	ソン･ヒウォン	SONG HEE WON	咸陽高等学校	京南

２）引率者名簿

	氏名	ローマ字表記	所属	地域
団長	ユン･チェビョン	YUN CHAE BEYOUNG	遠宗高等学校	京畿
引率	チ･ヨンヘ	JI YOUNG HAE	遠宗高等学校	京畿
引率	イ･ジユン	LEE JI YOON	大邱広域市教育庁	大邱
引率	ソ･ヘミ	SUH HAE MI	国立国際教育院	ソウル
引率	パク･ユジン	PARK YU JIN	国立国際教育院	ソウル

２．日程

	日付	時間	プログラム
1	9 月 19 日 （火）	午後 夜	成田空港到着 オリエンテーション
2	9 月 20 日 （水）	午前 午後	訪問：早稲田大学 訪問：駐日韓国大使館　韓国文化院
3	9 月 21 日 （木）	午前 午後	訪問：関東国際高等学校 散策：渋谷駅周辺
4	9 月 22 日 （金）	午前 午後 夜	浴衣着装体験 学習成果発表会 フェアウェルパーティー
5	9 月 23 日 （土）	午前	成田空港発

３．受入事業概要

＜９月２０日（水）＞

○早稲田大学

早稲田大学では担当職員から大学概要や留学制度について説明を受けた後に、韓国からの留学生と意見交換を行った。早稲田大学の学生数や学部・学科等の特色についてや、留学するにはどのような方法があるのか等詳しく説明を受けた。留学生との意見交換では日本での生活や進路等、韓国団が疑問に思っていることを話し合った。

大学概要の説明

キャンパスツアー

留学生と一緒に集合写真

○駐日韓国文化院

駐日韓国文化院では、ハングルについて展示してあるギャラリーや日本で一番韓国に関する本が蔵書されている資料室、韓国伝統の様式を生かした庭園を見学した。また、孔炯植（コン・ヒョンシク）文化院長から文化院が行っている活動や文化交流の意義についての講義を受け、日本における韓国文化や日韓交流への理解を深める機会となった。

資料室を見学

文化院長の講義

＜９月２１日（木）＞

○関東国際高等学校

関東国際高等学校では、午前中は日本と韓国の暮らしや学校生活、卒業後の進路について話し合い、日韓の共通点や相違点への理解を深めた。午後は「言語の未来と教育について」と題してディスカッションを行い、AI やインターネット等の技術革新が進む中で、将来の外国語教育はどうなるのか、どうすれば自国の言語を守ることができるのか、意見を交換した。

ディスカッションの様子

話し合った内容を発表

関東国際高等学校の生徒と集合写真

○渋谷駅周辺散策

関東国際高等学校の生徒と一緒に、グループに分かれて渋谷駅周辺を散策した。班毎に好きなところを周り、買い物をしたり、ご飯を食べたりして、日本の若者文化を体験した。

散策の様子①

散策の様子②

＜９月２２日（金）＞

〇浴衣着装体験

日本和装協会より講師をお招きし、前半は日本文化や和装の特徴や歴史についてのお話を聞き、後半は浴衣の畳み方・着方を教えてもらった。参加者は浴衣の着付けに挑戦し、日本の伝統文化を体験することで、日韓の文化を比較する機会になった。

着装体験①

着装体験②

浴衣を着て集合写真

〇フェアウェルパーティー

事業の締めくくりとしてフェアウェルパーティーを行った。中野理美文部科学省総合教育政策局国際教育課長やユン･チェビョン韓国団長より挨拶があり、参加者からも事業を通しての感想を発表した。

手巻き寿司の作り方

誕生日をお祝い

４．学習成果発表会

１）１班

①共通点

・中国から伝わった漢字を使っている。

・目上の人への敬意を払ったり、敬語を使ったり、男女差別といった儒教文化。

・持続的な少子化、高齢化現象の深刻化。

②相違点

・日本では未だに現金が使われるが、韓国ではキャッシュレス決済が基本。

・韓国ではみんなが流行の服を着るといった関係主義社会だが、日本は個人の個性を尊重する雰囲気があり個人主義。

③日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・路上でタバコを吸う人がおらず、吸い殻のポイ捨てがない。

・軽くぶつかっただけでもお互いに「すみません」と言う。

・地域ごとに特色のあるお祭りが多く残っている。

④韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・鉄道は公企業が運営しているため交通費が安い。

２）２班

①共通点

・高校の授業が 50 分で、制服を着て通っている。

・礼儀を大事にしているため、挨拶文化が根付いている。

②相違点

・韓国では学校で給食を食べるが、日本ではお弁当を持参する。

・災害への認識は、日本の方が韓国と比べて地震が多いため、安全に対する認識が優れている。

③日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・日本の他人に迷惑をかけない文化から、他人への配慮や社会的な意識向上。

・各地域の特性を生かした地域活性化政策。

・学生割引制度。

④韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・地下鉄の会社の統一化。

・インターネットバンキングやダッチペイを導入したデジタル化。

３）３班

①共通点

・AI や将来の職業等について共通の問題を抱えており、解決策を考える必要がある。

②相違点

・日本は天気に関係なく湿度が非常に高い。韓国は梅雨の時期など一定の期間だけ湿度が高い。

・日本の大学のキャンパスは韓国よりも小規模で、複数のキャンパスが近距離に配置されている。

③日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・日本の道路は韓国と比べてゴミが少なくきれいで、不法駐車も少ない。

・大学では留学生に対して柔軟な入学機会を提供し、入学時期も 4 月、10 月の 2 回ある。

④韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・韓国の電車はホームドアが十分に設置されている。

４）４班

①共通点

・祭りが、本来宗教的な意味を持ち、神様への祈りや願い事が起源である。

・花火大会のような様々な行事が行われる。

・祭りでは自然環境や地域の特徴などが活かされている。

②相違点

・日本では、浴衣や着物を身にまとうことで、祭りの雰囲気をより豊かにしている。また伝統舞踊、音楽が中心で、一般市民が参加している。

・韓国では、普段着を着用することが多く、音楽、ダンス、演劇、芸術などに焦点を当てる傾向がある。

③日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・伝統的な衣装を身にまとい、伝統行事を体験できるプログラムを取り組むこと。

・もっと多くの人々に知らせるために、体験型のイベント開催やテレビなどのメディアを活用し、地域の魅力をアピールした広報活動。

④韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・開催地域の特産品を積極的に宣伝し、活用することで、地域の農家をサポートし、地域経済の活性化に寄与する。

５）５班

①共通点

・家族中心の社会であり、家族の密接な関係を大切にしている。

・両国ともに民衆主義と法治主義に基づいた代表的な国家としての特質を備えている。

②相違点

・韓国の箸は長くて鉄でできている。日本は個人食文化の影響により木製の短い箸を使う。

・韓国は大学進学が一般的で、全ての大学が同じ入試制度を採用している。日本は大学ごとに異なる入試制度があり、大学進学率が相対的に低い傾向がある。

③日本のいいところ（韓国に取り入れた方がいいと感じたこと）

・日本のバスは降りる際に乗客の利便性を高めるために、バス停の方向に傾く仕組みがある。

④韓国のいいところ（日本に取り入れた方がいいと感じたこと）

・行政処理はデジタル化され、比較的早くかつ便利である。

５．成果と課題

（１）企画について

本事業は、日本と韓国の高校生の相互交流を通じて、友好親善を深めることや国際的な視野と資質を持った青少年の健全育成を図ることを目的としている。今年度は「日韓文化交流を通して、国際交流において自国のことを知る重要性について理解するとともに、相手国のことを尊重した上で、日本と韓国の共通点・相違点を説明できるようにする」という目標を掲げ、日本人高校生との交流や日本文化体験等を行うことで、目的・目標を達成するためのプログラムとした。

（２）成果

日本での韓国文化について学んだり、日本の伝統文化を体験したりすることで、日韓の文化を比較し、今後の文化交流について考えるきっかけを作ることに繋がった。

また、大学を訪問することで、国際的な感覚を身につけるとともに、勉学へのモチベーションを高めることに繋がった。留学生に話を聞く際には、日本と韓国の受験や生活等の違いについて考えを深めることができた。

更に、同年代である日本人高校生とディスカッションや散策をして１日を過ごし、たくさん話しをする時間を作ることで、韓国人高校生は日本の学校生活について理解するだけではなく、文化や言葉を共有することに楽しさを感じたり、より日本人高校生と仲を深めたりすることができた。

最後に、プログラム全体を通して、学習成果発表会に向けた準備を進めることで、韓国人高校生が日本への興味の幅を広げるとともに、自身の考えを再考することができ、目的を持った交流に繋げることができた。

（３）課題

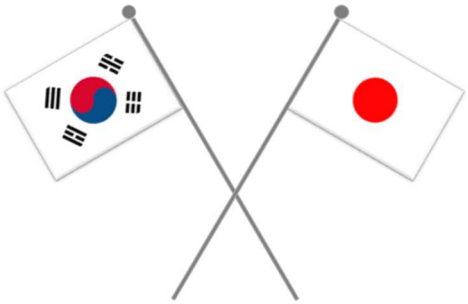
４年ぶりに対面交流で行うことができた本事業だが、新型コロナウイルスの流行によってオンラインでの交流が活発になった中、訪日する意義を今一度考えなおす必要があると感じた。ただ話して、聞いてというだけでは、日本に来なくてもできる活動である。そのため、日本の生活や文化を直接体験する中で、日本人と活発な交流ができるようにプログラムの組み立てを再考する必要がある。

また、短い活動期間で学習効果を高めるために、日本人との交流時間を増やし、国際理解に繋げるとともに、日本語を使う時間も増やす必要がある。

次年度以降は以上のことに配慮した調整を行い、韓国人参加者により質の高いプログラムを提供できるようにしたい。

（４）謝辞

最後に、本事業の企画・運営に際し、多くの方に携わっていただいたことで、日韓の高校生にとって有意義な研修を実施することができた。プログラムにご協力くださった全ての方に心より感謝申し上げる。



令和５（2023）年度　文部科学省委託事業「青少年国際交流推進事業」
日韓高校生交流　事業報告書

令和６年３月発行

編集発行
◆
独立行政法人　国立青少年教育振興機構　国際・企画課
http://www.niye.go.jp
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町 3-1
TEL　03-6407-7616

本報告書は、文部科学省の委託事業「青少年国際交流推進事業」として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和５年（2023）年度「日韓高校生交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。